

基礎神学 (Fundamentaltheologie) とはなにか¹⁾

—— 世俗化の脈絡における神学的基礎作業

マテイアス・ペッツォルト

この講演では基礎神学の成立、発展について話そう。その際にいささかドイツにおけるキリスト者と神学の状況についても話さないわけにはいかない。この二つの課題は互いに結びついている。基礎神学というのは信仰が受けるチャレンジに対する神学的な基礎作業だからである。ドイツにおいてチャレンジしている脈絡は世俗化という概念をもって言い表すことができよう。

私の講演はこういう展開になる。第一に基礎神学という概念について定義したい。第二に世俗化という脈絡について語ろう。第三に手短にだが、基礎神学に関してその歴史的な発展について語る。続いて第四に、基礎神学について私が考えていることをお話しする。最後にカトリックの基礎神学とプロテスタントの基礎神学の関係の現状について短く述べておきたい。

1 基礎神学とはなにか。一つの定義

基礎神学についての私の定義はこうである。基礎神学とは、外からの問い掛けの様々なチャレンジに対し、また確かさを求める内的な求めに対しての、キリスト教信仰の弁明に関する組織神学的な省察である。それは、そこにおいてまたそれを通してイエス・キリストが信仰の根拠となる根本的なプロセスへの考察として起ころるのであり、現在の存在経験や学問責任の地平における、このようにして根拠づけられた信仰の説明を指すものである。

2 脈絡的神学——世俗化の脈絡における神学

この定義はキリスト教信仰にとってチャレンジとなつている脈絡を指し示す。キリスト教信仰が外からチャレンジを受けているのである。たとえば、キリスト教信仰は無神論的宗教批判によって問い掛けを受ける。キリスト教信仰に対する批判的な問い掛けはまた、他の諸宗教からも来る。

しかしまたキリスト教信仰は信仰そのものにおける疑いや不確かさによつてもチャレンジを受ける。キリスト者は外から来る批判に直面して、信仰において不確かとなる。疑いや不確かさはまた、社会におけるキリスト教会の意味喪失に直面して、キリスト者の間に見られることになる。

このような様々なチャレンジへと導くことになつた展開全体を記述するために、ドイツでは好んで「世俗化」という概念が用いられる。

この概念が日本の文化と言語にとってどのような周知のことであるかを、私は知らない。ドイツ語や他のヨーロッパの諸言語ではこの概念は多くの意味をもっている。すなわち、信仰の世俗化、社会の脱教会化、脱キリスト教化、宗教の死滅、無宗教、社会の中へのキリスト教の世界内化⁽²⁾(例えば隣人愛というキリスト教の戒めが人権という形で社会的文化の構成要素となることを指す)などである。社会学では世俗化をもって、近代の分化発展における社会的部分価値が部分体系として自立することを意味する。私はこのことをすぐ後で説明する。

基礎神学はこの関連で、キリスト者を助けて、彼らの存在経験の中でキリスト教信仰(と教会)の役割を理解させるのである。これはたとえば、キリスト者を助けて、世俗化のプロセスを理解させるということである。

中世末に政治は宗教の影響から脱した。逆に宗教は政治に対して自立した。宗教改革はこのプロセスを大いに促すことになった。宗教改革は、霊的なことがこの世のことから分けられて、両者が混同されないようにすることに価値をおいた。こうして宗教改革は教会財産(教会所有の土地や不動産など)をこの世的使用に供した。これが当時は世俗化と呼ばれたのである。それは教会に託されたもの、今日流に言えば、宗教的機能とはなんの関わりもなく、土地などを活用するという意味でのことだった。修道院は施療所、病院になり、学校や大学になった。この意味で宗教改革は教会君主領を世俗君主領に世俗化した。教会君主領の世俗領邦化であった⁽³⁾。宗教に対する政治の自立と、政治に対する宗教の自立に伴って、他の社会的な分化発展が起こった。経済が宗教から自らを解放した。教会的な利子禁止がどのようにして消えていったかという例を考えてみるがよい。宗教に対する経済の自己解放は政治の制約下からの経済の自己解放と同時に起こった。経済のこのような自立は同時に、経済に対する宗教や政治の自立をも意味した。似たような仕方近代において、法や学問という部分体系が自立し、他のものがこれに続いた。ここに見えてくるのが社会的部分体系の近代における分化発展である。部分体系

の、現在体験されている多元主義はこのプロセスにおける過渡的状況を示しているだけである。機能的に分化した社会においてはもはや社会的な中心は存在しない。すべての分化体系はむしろ自らの論理において行動し、それゆえにまた他の部分体系によって干渉されることを好まない。社会的中心の喪失は、このような多元主義をもって社会がバラバラになることを意味しない。むしろ、社会的部分諸体系がそれぞれ固有の機能を超えて共に働くことによって保たれるのである。

この社会的状況は多くのキリスト者を不安にさせる。宗教は社会の中であって他の多くの部分体系の中の一つの部分体系に過ぎなくなっているからである。ここに記述した発展が宗教の意味喪失として理解されているからである。あるいはこの発展は宗教の死滅と解釈されねばならないのだろうか。カール・マルクスは既に一九世紀に宗教の死滅を予告した。またフリードリヒ・ニーチェは一九世紀の終わりに差し掛かって、神の死について語った。このように世俗化のプロセスに伴って、多くの宗教批判が起こった。二〇世紀にもソ連や東欧諸国、またアジアのいくつかの国で共產主義独裁が戦闘的な無神論と結びついた。東ドイツでは我々は今なおその影響を感じている。人口の三〇パーセントほどがキリスト教会に属しているに過ぎない。約七〇パーセントの人々は、自分たちが無宗教だと思っている。私がここでいささか記述したことは、先に「現在の存在経験」と言ったことなのである。

キリスト者がこの状況を感じ取れば、信仰に関して不確かとなるであろう。世俗化のプロセスに対して責任があるとも感じるであろう。それゆえ大雑把な言い方をすれば、世俗化に対して拒否の姿勢を取ることになる。その際には、世俗化のプロセスはキリスト教にも根があること、まさに宗教改革に根があることに気づかないのである。ここでは人は区別することを学ばねばならないのである。その際には例えば次のような問いがある種の役

割を果たすことであろう。

キリスト教の諸形態、諸教派においてすぐれてキリスト教的なのはなんであろうか。キリスト教において第二義的な発展、場合によっては誤った発展とはなんであろうか。宗教批判の誤った諸形態の中で誤っているのはなんであろうか。キリスト教に対する無神論的批判はどこが正しくて、キリスト教が変わらねばならないのだろうか。どのようにしてキリスト者は世俗化のプロセスを正しく理解しなければならないのだろうか。根本主義(ファンダメンタリズム)はどの程度まで世俗化のプロセスに対する、キリスト教における誤った反動なのだろうか、等々である。こうした問い(に答えること)は「弁証学」に当たるであろう。基礎神学はこれらの問いに對して答えを見出さなければならないのである。

だが基礎神学の課題領域には他のいろいろな問いもある。例えば、神学の「学問責任性」についてのあらゆる問いである。信仰と知識とはどのような関係にあるか。信仰の学としての神学はどのようにして認識に到達するのか。啓示からの認識は他の諸学における諸認識とどのように関係するのか。聖書は神学的認識の根拠としてどのような役割を果たすのか。神学の中において歴史的諸認識(聖書学や教会史などの)と組織的諸認識とはどのように関係するのか、等々である。

これらの認識論的、また学問論的問いは先に挙げた弁証論的問いと密接に関連する。キリスト教における誤った発展から区別し、また宗教批判におけるキリスト教の歪曲から区別して、なにが本来キリスト教的かという問いを論じる場合には、私はどのようにして本来キリスト教的なものを認識しているのか、キリスト教的信仰に關してどのようにして妥当な発言をすることができるか、他の諸学問もキリスト教について妥当な発言をすることができるかという問いも同時に解明されねばならないからである。

このような複合的な問いに直面すれば、こうなる。ここで問題になっているのは、神学に関わる基礎的な問いである。この基礎的な問いのメタファーのために、神学の専門用語として「基礎神学[Fundamentaltheologie]」という用語が使われることになった。「根本主義[Fundamentalismus]」とは混同されてはならない。

3 基礎神学の歴史から

弁証論はキリスト教神学においてはずっと以前から行われていた。この単語は既に新約聖書においても出てくる。一ペトロ三・一五には「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明(アポロギア)できるように備えていなさい」とある。キリスト教の最初の一世紀において優れた神学者はユステイヌスのように弁証家と呼ばれた。ローマ帝国にあつて異教の批判に対してキリスト教を弁明し、知識人に対して、キリスト教信仰こそがよりよい哲学であることを確信させようとしたからである。弁証学はキリスト教においてとりわけ近代にあつて重要となった。一七世紀以降ヨーロッパにおいては宗教批判が強まったからである。

同様に、認識論的、また学問論的説明は神学において長い伝統をもっている。既に中世スコラ主義においてそれは場を得ていた。宗教改革の神学は認識論的問題を教義学の序説において取り扱った。そこでは聖書が原理論の中心を占めた。近代以降この問題はいよいよ重要となった。宗教批判が特に学問的批判としてキリスト教信仰に対して向けられ、学問と宗教の対立を主張したからである。

一八〇〇年に初めて神学的基礎問題全体に対して「基礎神学」という概念が用いられたが、それはヨハン・フ

リードリヒ・クロイカー⁽⁶⁾というプロテスタント神学者によってだった。しかし一九世紀の最も著名なプロテスタントの基礎神学者はダニエル・フリードリヒ・シュライエルマッハーであった。しかし彼はむしろ「哲学的神学」という言い方を用いた。⁽⁶⁾

カトリック側では基礎神学という概念は一九世紀後半から用いられるようになった。この発展は第一ヴァアティカン公会議 (一八七〇年) の *recta ratio fidei fundamenta demonstrat* (「正しい理性は信仰の基礎を証明する」)⁽⁷⁾ という定式によって支えられることとなった。信仰のこの理性的な証明は一九世紀においては三段階の証明手順へと構築された。 *Demonstratio religiosa* (宗教的証明)、 *demonstratio Christiana* (キリスト教的証明)、 *demonstratio catholica* (カトリック的証明) である。この三段階をもって構築される証明によって啓示の *credibitas* (信すべきこと) と *sermo* から結果する *credentitas* (信じる義務) とが理性の基礎をもって保証されるというのである。

1 *demonstratio religiosa* は宗教を証明する。すなわち、神証明の助けによって神存在が証明されるというのである。神が自己を啓示し、そのような自己啓示が人間の理性にとっても認識されるということが、理性にも明らかとなるというのである。 *demonstratio religiosa* は一般的な啓示規範を提示する。

2 この啓示規範がイエス・キリストによって成就される、あるいは成就されたということ、このことを特に歴史的に証明するのが *demonstratio Christiana* の課題である。特にイエスの奇跡、イエスの人格の全体像、イエスの復活が、イエス・キリストは *legatus divinus* 神に遣わされた者であるという要請の信すべきことを証明する。

3 *demonstratio catholica* においては、イエス・キリストが彼の教会を設定し、教会は啓示を守るものである

り、そのような教会はこの課題をもってローマ・カトリック教会において具現していることを証明しようとする試みる。

この三段階の論議経過の全体は、啓示や信仰をもち出すことなく、純粹に理性的な（哲学的および歴史的）証明として理解される。基礎神学は信仰へと導くものであって、啓示に対して人間の理性洞察を開くべきものである。これが達せられれば、信仰の啓示認識に至ることができるようである。そして信仰の啓示認識は教義学の課題となる。この体系の背後にはトマス・アクィナスの *Gratia non tollit sed supponit et perficit naturam*（恩恵は自然／本性を破壊することなく、これを前提とし、完成させる）という原理がある。この原理は啓示の恩恵を人間の自然的理性との調和的關係の内に見ているのである。

この基礎神学体系に対してプロテスタント神学は多くの点で批判した。ここでは二点だけを挙げておこう。

1 宗教改革的な見方では理性は罪によって暗くされている。それゆえ人間は自分の本性からしては神を認識することはできない。プロテスタント神学は二〇世紀においてカール・バルトの下で全く啓示神学となった。基礎神学は「自然神学」として拒否されたのである。

2 プロテスタント神学にとって特に第三の歩み、*demonstratio catholica* は疑いを抱かせるものである。すなわちここでは理性根拠をもって、ローマ・カトリック教会のみが唯一の真の教会であると示されているからである。この目的設定の下で「基礎神学」が理解されるのであれば、プロテスタント神学はもはやこの分野と関わりを持つとしなかつたであろう。

一九世紀の終わり以来基礎神学は典型的にカトリック的なものと見られてきた。プロテスタント神学において

は何十年にもわたってこの概念は用いられなかったのである。

それにもかかわらず二〇世紀後半になってプロテスタントの側でも、「プロテスタント神学も基礎神学を必要とする」という考えに至った。

Wilfried Joestにとっては、社会がキリスト教的伝統の自己理解から離れることになっている事実が、包括的な基礎的考察を必要としていたのであった。神学はこれをもはや従来のように教義学序論、序説の中で果たし得なくなったというのである。『基礎神学 神学的基礎問題と方法問題』(Stuttgart 1.Aufl. 1974, 3.Aufl. 1988)というタイトルの彼の教科書は今日までのところプロテスタント側での、基礎神学についての最初の、唯一の教科書である。

Wolfhart Pannenbergはその著『学問理論と神学』(Frankfurt 1973)において、基礎神学の機能は、神学的発言の関連諸枠を示すことであると規定している。基礎神学は一般的な宗教諸問題の平面でキリスト教啓示の特殊性を規定し、他の信仰のあり方に対するキリスト教の優越性を示すべきであるというのである。

一九六八年に初めてチューリヒにおいてプロテスタント神学部で最初の基礎神学講座が設けられた。これに招かれたのがGerhard Ebelingである。「プロテスタント基礎神学の諸考察」という、一九七〇年の大論文において彼は初めてこの科目についての考察を公にしたのである。加えて彼の著『神学研究 神学諸科の方向付け』(Tübingen 1975)はそれ自身が基礎神学のプロジェクトであることを示している。この本においてエベリングは神学諸科全体の中でこの新しい分野の課題を提示している。

この三人ともが、基礎神学に関する他の多くの労作を公刊している。興味深いのはこの三人ともがそれぞれ教

義学著作を著していることである。この点で基礎神学の問題がいかに独立したものとなっているかということを見ることができよう。同時に認めうるのは、神学的な基礎諸問題についての論述が果たされていることによつて教義学がどれだけ益を受けているかということである。

聖書学者たちもまた、正確に言えば Ferdinand Hahn や Jürgen Habermas といった新約学者たちも基礎神学についての労作を公にしている。聖書学がプロテスタントの立場からする神学的基礎論をいかに重視しているかということが明らかになる。

爾来いくつものプロテスタント神学部において基礎神学の講座が設けられた。またドイツ、アメリカ、スカンディナヴィアの多くの神学者たちが基礎神学についての論述を公にしている。これらすべてを今挙げることはここではしない。⁽⁹⁾

しかし、プロテスタント神学の中には、プロテスタント基礎神学を独立した形で提示することに対して批判もあることをここで述べておくべきであろう。そうすることによつて教義学からする方法論的基礎問題がここに移されてしまうから、というのである。教義学で扱われるような神学の基礎問題が信仰の内容的諸問題との関連ではや解明されなくなるという危険があり得るといふわけである。

プロテスタント神学内で基礎神学というそれ自体独立し、完結した課題領域を設けることに確信を持つて私は、このために努力している。このために私は三学期にわたる講義を用意している（参考資料参照）。またこれまでいろいろと基礎神学についての私の考えを公にして、討論に供してきた。⁽¹⁰⁾そこで以下においては私が考えているところを短くお話ししたい。

4 神学のメタ理論としての基礎神学

基礎神学は神学のいろいろ異なった理論遂行の「上へ *meta*」と見渡すものである。その際目標は、(1) 聖書学 (旧約学と新約学)、教会史、組織神学 (教義学と倫理学)、実践神学といった異なった学問分野に共通する基礎的諸問題を視野に収め、(2) このようにして得られた基礎学問的問題意識を、全体を見通した仕方ですべての神学諸科のその時々々の考察遂行の中に持ち込むことである。

この見方に従えば基礎神学は次の五つの、相互に関連ある課題領域を包括することになる。

a 弁証学

内的また外的なチャレンジの脈絡においてキリスト教信仰に関する弁明のための組織的・神学的な分野として基礎神学はキリスト教信仰の本質と真理を問う問いに対して答えを見出さなければならぬ。

キリスト教信仰の本質を問う問い…キリスト教信仰とは本来なんであるのか。時の経過に伴って二次的に付け加わったり、あるいは本来的なものから逸れたところの、またキリスト教信仰の本来的なものをほとんどもしくは全く認識させないすべての発展に対してキリスト教信仰における本質的なものを問う問いである。キリスト教信仰における本来的なものを問う問いはキリスト教信仰の根拠を問う問いをもつて答えることができる (定義の部分参照)。キリスト教信仰の本質をもつてキリスト教のアイデンティティへの求めは解明される。

キリスト教信仰の真理を問う問いは弁証学的課題設定の第二の大きな領域を形成する。真理への問いに答えるための規範はキリスト教信仰の根拠である。真理への問いに答えるために必要な前提はこのようにしてキリスト

教信仰の本質を問う問いを解明することである。真理を問う問いの解明は信仰と神学の問題提起をもってする論議における中心的な課題である。ここでは基礎神学は、問題提起が事柄に即さず、キリスト教アイデンティティを停止させる、もしくはそれ自身矛盾して学問的に維持できない批判として登場する限りは、外からの問題提起が支持できないことを明らかにしなければならない。キリスト教信仰の真理を問う問いの解明のためには、基礎神学はいろいろな哲学的真理論と討論しなければならない。

b 神学的原理論

神学的原理論として基礎神学は神学という学問の研究対象を明らかにし、その理論的把握の可能性を解明する。これは神学的認識の源と構造とを問う問いへと導く。諸テーマはここでは啓示、聖書伝承、信仰告白、教会教理である。

c 神学諸科解題

神学諸科解題として基礎神学はその諸科の発展分化の中で神学の一体性を問う問いを扱う。聖書学（旧約学と新約学）、教会史、組織神学（教義学と倫理学）、実践神学といった神学の異なった学問領域はどのようにして研究対象の所与の一体性における共通する方向付けへと特定の視点を得ることができのだろうか。ここでは諸科間の学際的な対話が、神学における組織的、歴史的、社会的などといったいろいろな問題提起と方法のメタ理論的省察を必要とする。大きな課題領域はここでは、哲学的、また文学的解釈学の脈絡における神学的解釈学の作業である。

d 神学の学問理論

神学諸科解題の解明に伴って基礎神学は他の諸学問との対話において、また学問理論的討議への参加を通し

て、学問としての神学の性格を明らかにしなければならない。神学は信仰の構造への定着により、またイエス・キリストという根拠により他の諸学問と異なっている。基礎神学は神学の学問性を明らかにし、そうすることに よって他の諸学問の合理性に対して信仰の特定の合理性を伝達可能とする。

e 宗教というテーマ設定

上述した学問領域を横断して基礎神学は宗教というテーマ設定を作業する。(例えば哲学、宗教学、社会学といった)他の諸学問との学際的な対話の中で基礎神学は宗教とか宗教性という現象の研究に参加する。基礎神学はキリスト教信仰と宗教との関係について説明する。他の諸宗教との対話において基礎神学は宗教及び諸宗教の神学のための理論を開発する。

この第五点に関してはつきりしていることは、宗教というテーマ設定が基礎神学の他の課題領域を横断して存在しているということである。これに反して宗教が考察の出発点になっているとすれば、我々は基礎神学と関わっているのではなくて、宗教哲学と関わっていることになる。神学的な基礎諸問題を宗教哲学と理解し、作業するということが今日かなり広まっている。古典的なカトリック基礎神学も、*demonstratio religiosa* から始めるといふ点では、ある意味では宗教哲学である。しかし基礎神学についての私の考えは、明瞭に宗教哲学的理解とは異なっている。私は信仰という現象において出発し、本来キリスト教信仰とはなにかという、キリスト教信仰の本質を問う問いに終始している。信仰というこの手がかりこそが、基礎神学という分野の神学的性格を保証する。いずれにせよ基礎神学は、キリスト教信仰が宗教とどのような関係にあるのかをも明らかにしなければならない。この問題はこの第五の課題領域で取り扱われるのである。

5 プロテスタント基礎神学とカトリック基礎神学の関係の現状

先に述べた点は、カトリック側で基礎神学はどう進められているのかという問いを生じさせる。第二ヴァアティカン公会議（一九六二—一九六五）はカトリック基礎神学に新しい出発をもたらした。多くの新しい考えが生じた。その中でも基礎神学が今や多くの人々によって明瞭に、神学の一分野と理解され、信仰に関わるべき神学の前庭にある哲学とはもはや理解されなくなっているということがある。新しいすべての展開を見れば、カトリック基礎神学とプロテスタント基礎神学とはしばしばまさに近接している。こうして既に二〇世紀七〇年代には基礎神学をエキュメニカルに展開しようという関心が生じた。しかしそこにはまだほど遠いのが現状である。二〇〇九年五月には私はパードルボルのカトリック神学部で開催された基礎神学の国際会議において、基礎神学における教派間の相違の問題について講演した。私はそこにただ一人のプロテスタント神学者として招かれたのだった。この会議のテーマは「基礎神学はなんのためか」であった。この問いは、第二ヴァアティカン公会議以後の変化の後、カトリック神学は自らの基礎神学の特徴について不確かとなっているということを示している。最近何十年かの議論は見通しのつかないものになってきている。今では一九世紀の、宗教、啓示、教会という段階の古い論述に戻ろうという注目すべき傾向が存在する。パードルボルの会議ではこの復古的な努力が感じられたことであった。¹¹

注

- (1) これは二〇一〇年三月二日、日本福音ルーテル東京教会において、日本福音ルーテル教会東地区教師会に属する牧師たちのために語られた講演である。なお、Mathias Petzoldt氏は神学博士、現在ドイツのライプツィヒ大学神学部 基礎神学・解釈学教授である。
- (2) Ein Weltlichung⁷ すなわち「世界の中に入り込むこと」を指す。
- (3) 二つの国、二つの統治様式の宗教改革的区別は、この世俗化の概念の背後にあるわけだが、福音主義的教会理解の中に深く影響している。こうして教会はアウクスブルク信仰告白第七条によれば、神法による階層的構造というローマ・カトリックの看法と異なっており、聖書に即した福音の説教と、それに応じた聖礼典の執行という点において成り立つと考えられるようになった。こうしたまた、教会の職務も(司教聖別とか司祭聖別といった)秘跡的聖別によってではなく、召し、招聘によって設定されるということになった。教会法は神法とは理解されず、世俗権威の管理に委ねられる人間の秩序と理解された。秘跡理解の変化に伴ってたとえば、カトリック的な結婚の秘跡が、「この世の事柄」(ルター)と理解される結婚理解に変わったという点も認められる。Martin Hecker: Weltlichkeit und Säkularisierung, Staatskirchenrechtliche Probleme in der Reformation und im konfessionellen Zeitalter. in: Bernd Moeller (Hrsg.): Luther in der Neuzeit, Gütersloh 1983, 34-54.
- (4) Apologetik : 弁明、弁証もある。フュッペは 問題提起に対するキリスト教信仰の弁明、弁証である。
- (5) Johann Friedrich Kleuker, Grundriß einer Encyclopädie der Theologie, 2 Bde. 1800/01.
- (6) Friedrich Schleiermacher, Kurze Darstellung des theologischen Studium zum Behuf einleitender Vorlesungen, Berlin 1. Aufl. 1810, 2. Aufl. 1830 (シュトラインホルツマンナー、神学通論)
- (7) 教義憲章 [Dei Filius (神の子は)] カトリック教会文書資料集 3019°
- (8) Zeitschrift für Theologie und Kirche 67, (1970), 479-524. ⅴⅵ後 Gerhard Ebeling: Wort und Glaube, BD.IV, Theologie in den Gegensätzen des Lebens, Tübingen 1995, 377-419 に再録。
- (9) 例として挙げられる Mathias Petzoldt (Hrsg.), Evangelische Fundamentaltheologie in der Diskussion, Leipzig 2004.

- (10) Fundamentaltheologie – Disziplin und/oder Perspektive systematischer Theologie? Beobachtungen und Erwägungen aus evangelischer Sicht. Theologische Habilitation, Neueditionsau 1984; Notwendigkeit und Gefahren einer selbstständigen Fundamentaltheologie. in: Matthias Petzold (Hrsg.), Evangelische Fundamentaltheologie in der Diskussion, 21–40; W.G. Jeanron/M. Petzold: Art. Fundamentaltheologie. in: RGG⁴ Bd. 3 (2000), 426-436.
- (11) この会議の諸講演は二〇一〇年夏には出版される予定である。Josef Meyer zu Schlochtern und Roman A. Siebenrock (Hrsg.), Wozu Fundamentaltheologie? Zur Grundlegung der Theologie im Anspruch von Glaube und Vernunft. Verlag Schönningh Paderborn.

参考資料

基礎神学 キリスト教信仰の弁明

(ライプツィヒ大学神学部における三学期にわたる講義)

A 「信仰」とはなにか

- 1 一般的—人間的現象としての「信じる」と
(日常会話の中に見られるところ)
- 2 神学的な意味における信仰
- 3 キリスト教信仰—ある生き方
- 4 信仰と宗教
- 5 信仰と神学

B 信仰の根拠

- 6 信仰の根拠を問う問い
- 7 啓示
- C 信仰の伝承
 - 8 ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の聖書理解
 - 9 信仰の根拠ではなく、源
- D 信仰伝承の理解について
 - 10 神学の外と内とにおける解釈学
 - 11 神学的解釈学はパラダイム変換の前に立っているか？
- E 信仰の問い掛け
 - 12 聖書の証言における不信仰と「無神論」
 - 13 古代における無神論と民族神
 - 14 近代の無神論
 - 15 神学的弁証学…概念、目標、立場
- F 信仰の真実
 - 16 人間の基本的な問いとしての真理を問う問い
 - 17 キリスト教信仰と神学にとつての真理概念の意味
- G 神学—学問であるか？
 - 18 問題の発展史的叙述
 - 19 他の諸学問に対する神学の近さと遠さ（例えば哲学、歴史学、自然科学に対して）
- H 神学の一体性とその諸分野の多様性
 - 20 神学の諸分野への解体
 - 21 一体性への努力

- I
基礎神学
- 22 組織神学の一体性への特別な問い
- 23 その成立の歴史
- 24 カトリックとプロテスタントの基礎神学
- 25 宗教哲学としての基礎神学？
- 26 諸宗教の神学としての基礎神学？
- 27 基礎神学―組織神学の一分野、また神学全体への先を見通した方向付け

(訳・徳善 義和)